
託された魔通師と守った魔通師

詩句谷 田茂利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

託された魔通師と守った魔通師

【Nコード】

N9776Y

【作者名】

詩句谷 田茂利

【あらすじ】

へたれたニート、北谷蔣一は中卒であり、一日中パソコンの前で遊んでいるだけのダメ人間。エロゲを買いに久しぶりに外出した時、彼は武装集団に追われている少女、エレーナとばったり会う。エレーナは蔣一が魔術師だと説明し、蔣一は彼女と彼女の周りの魔術師に会う事で現代社会の裏、魔法の社会を知る。楽しく彼女と他の仲間と過ごしながらも、蔣一は魔術師達の血塗られた戦争に巻き込まれる。そして、その時になって彼はエレーナの存在を理解する。時には笑えて、時にはシリアスなファンタジーバトル/コメディ小

説！（なのでしょつか？ここは読者が決めるものなので笑）

プロローグ - 僕が「普通」であった頃

プロローグ

北谷蔭一。それが僕の名前。外見はミディアムの黒の髪、黒と云っていい程濃い茶色の目である。背丈はおおよそ170センチであり、おおよそ平均である。顔立ちは悪くなく、イケメンかブサメンかのどちらかに分類されなくてはいけないのならば、イケメンの方に属するのだろう。しかし、これが僕の唯一の取り柄と言ってもいいだろう。なぜなら、僕の実際の人生は一般的な社会観点から言えば、最低の人生であるからである。成績はオール一、運動能力は1km歩くだけでもうボロボロ、リア充がyであつたら、必ず僕は-yである(要するに、僕とリア充の関係は $y'' - x$ の一次関数? いや二次関数か? まあとにかくとちらかにより表せる)。これと言った特技/趣味はない。

こんなだめな男を、冷酷な親は見捨てた。父親は大手会社の部長、東大卒である。そんな父は、今は別居中。そこまで僕が嫌いであつたらしい。母は父の事を愛していて、父も母の事を愛していたらしいが、このようなダメ息子と一緒にいるのが耐えられないと思いはじめた。それは僕が中2の時。その時、二人とも僕を捨てたかつたらしいのだが、子供を親の介護無しに放っておくのは違法である為、二人はコインを投げて、負けた方が僕を養い続ける必要があるという事になった。父が勝ち、母は負けたので、現在に至るまで仕方なく僕と一緒に住んでいる。

僕には琴音という妹もいる。妹は、正直言つて結構可愛い。な、妹についてこんなことを言うエロゲ中毒は僕の事だ。妹は普通の成績、普通の全てであつたが、全てがカス同然であつた僕の事を慕つてくれた。しかし、それは彼女が中一、僕が16歳(なぜ高一と言わないう理由は、僕が中卒であるからだ)の時、彼女は保健体育で、なぜ僕が部屋の中に長時間籠城して、ハアハアいいながら、「

たん」と言っている理由を学習したらしく、それ以来妹とはご無沙汰だ。

最近、僕は部屋の中にずっと籠城している事が多い。それは部屋の中でしか暮らしたくない僕、そして僕の顔も見たくない親（まあ母だけなのだが）と妹の両方の願望を叶えている為、一石二鳥である。ちなみに、食べ物や扉の下のような小さな長方形のような開く扉から入れられる。尿意の時は、しょうがない。トイレに行く。しかし、これは夜中の3時とかに行われるので、家に支障は出ない。

非常に楽しい生活である。まず、好きな時に起きる事ができ、好きな時に寝る事ができる。それに僕は中卒だから（オール一ですからね、しょうがないと言えばしょうがない）、勉強もしなくていい。

一日中、好きなだけ二二動画を観、どうしようもないコメントを書き、3ちゃんねるなどに投稿し、つまらなくなればネトゲでもやり、それでさえ終わってやる事が全くなかった場合、まあエロゲでも立ち上げ、後は御察してください。このサイクルを僕は眠くなるまで繰り返す。そのようにして日々は過ぎ去るのであった。

しかし、何故か僕はこのとある日に理由もなく、久しぶりに外に出ようと思った。

これが自分の人生を完全に変貌するとは知らずに……正直言って、僕はよく想像するのである。もしこの日僕が外出しなかったら、僕の人生、僕の家族、世界情勢、魔通師と呼ばれる特殊な魔術師のグループの人間、名も知らぬ多くの人々、そしてこの中で最も大切である、この魔通師達に利用された可哀想な金髪の少女の人生はどう変わったのだろうか？これは答えられない質問であろう。だからといって、僕は問う必要はない、とは思わない。元々、問って答えが戻って来る質問等、数が知れているのだから。これは、人生をニートとして謳歌しよう、と思った中卒の少年の観点から描かれた、世界最高峰のアメリカの軍隊等あっさり倒してしまう力を持った魔通師と呼ばれる魔術師と彼らの一員の金髪の少女についての物語の、序章である。

プロローグ・僕が「普通」であった頃（後書き）

え、こんにちは。初投稿です。

作者は詩句谷田茂利をペンネームとして使っている人間です。現在中学三年生、受験生です。しかし、受験なんかほっぽって小説を書いている、ある意味頭の逝かれた人間です。ちなみに、人生の三分の二を米国で暮らしている人です。だから、小説内の文法とかグチャグチャかもしれません。

小説を書きはじめたのは、とある友達達との会話で、小説を書こうか、と言う話題が出たのがきっかけです。それは2011年の6月位だったと思います。最初はおもしろ半分でしたけど、その時から僕達は全員小説を書いています。この小説は、僕が9月あたりから書きはじめた小説です。どうぞ温かく見守ってみて下さい。

後、批評は是非御願います。できる限りこれ（この小説）を良いものにしたいので。勿論いいコメントも欲しいです！

読んだ後感想、又は評価点を付けて頂けると嬉しいです！

では、第一章のときまたお会いしましょう。

一章―金髪の少女と面倒な事件（前書き）

ここまでのキャラ：北谷蔭一 - 主人公。中卒のヘタレ。

わかりにくい単語：レイピア - 細長い両刃の剣。片手で器用に使える軽さが利である。

サブマシンガン - フルオート射撃（引き金を引き続けるだけで弾が出続ける）の銃。拳銃より大きく、ライフルよりは小さい。短機関銃とも呼ばれる。

機関拳銃 - 拳銃位の大きさのサブマシンガン。

一章―金髪の少女と面倒な事件

いや、訂正しよう。理由はあった。俺の家はすごい事に、秋葉原にある。そのメイド喫茶の女の子と会って、エロゲを更に購入する為に外に出た。なぜ久しぶりかと？最近はコンピューターがあれば、欲しい物はクリックするマウス、欲しいもの売っているサイト、そのサイトの登録番号、そして金しかいららないからだ。僕はもっぱら働き等しないが（だってそんなの負け組のする事だろ？）、一応母が僕に小遣いをくれる。なぜかと言えば、妹だけに与え、僕に与えないのは周りの人間から見て不自然であるからである。それが、稀に僕が妹と母と顔を合わせる時である。週に一度、小遣いをもらう為に数秒間お互いの顔を見る。今日はその小遣いをもらう日である。大変いやな作業である。まず、僕が、皆がいる時に、食卓へと家の一階に下りる。そこにはできる限り僕と目を合わせないようにと努力をしている母がいつもいる。彼女は別になにもせず、待機しているだけである。僕は階段を下りた後、ゆっくりと食卓へと向かう。そこには、よくトーストを口にくわえたまま学校に行く為の準備をしている妹の琴音がいる。彼女は別に僕と目を合わせないようにと努力はしていないが、別に僕の方を向いてなにかを言う訳でもなく、何らかの感情を顔に出す訳でもない。僕は食卓の椅子に座る。それが全ての合図であるように、母は財布から千円札を数枚抜き取り、五百円玉をその数枚の千円札の上に乗つける。五百円玉の上に指を置き、札を押さえる。母は指を後ろに少し引つ張り、そして指を僕の方へと素早く動かし、札と五百円玉を滑らせる。五百円玉が効果的なおもしろとなり、札は押さえつけられる為、札と五百円玉はガラスのテーブルを華麗に滑っていく。僕のいる反対側まで滑って来ると、僕は自分の小遣いがそれ以上滑るのを阻止する為手で押さえつける。その後、僕は金の量を確かめる。千円札が二枚。もちろんおもしろである五百円玉一枚。計二千五百円。そして、僕は自分の部屋

へとゆつくりと戻って行く。非常に面倒で大変な作業であるが、収入を得る為の代償だ。この苦難を糧に、僕はエロゲを手に入れる事が出来る。

そして僕は金を得ると、自分の部屋の中で待機する。そこで僕は母が外出するまで待つ。彼女が外出すると、僕は数分待ち、こっそりと外出する。そして僕は自分のショッピングをしに繁華街の方へ出る。着いた頃にはもう昼は過ぎていて、太陽はゆつくりと落ちていた。いわゆるまだ夕方ではないけど、かなり夜に近づいている時間帯である。おおよそ四時半だろう。エロゲは簡単には手に入らなかった。問題はメイド喫茶の方であった。入ろうとしたら混んでいて、一時間程待つ必要があると言われた。

今考えてみれば、なぜここでメイド喫茶を諦めなかったのだろうか？と思う。僕はこの瞬間の自分もよく問う。なぜ諦めなかったのだろうか？そうすれば僕は、苦労はしなかった筈だ。しかし、その分様々な人間が苦労をしたのだろうか。今僕はその人達を知っていて、自分にとって大切な存在であるから、絶対に自分が様々な苦労した方が絶対にいいと思う。でも、この時の僕はその時の人達を知ってさえいない。なぜ知らぬ人間の為に僕が苦労をしなくてはいけないのだろうか？と言う風に僕は考えただろう。これは客観的に見て普通の思考ではないのだろうか？このような考え方が普通である人間社会は果たしていいものであるのだろうか？このような考え方があるから、あの少女は苦労しなくては行けなかったのではないのか？人間と言うものは、非常に冷酷で、そのせいで色々な問題を引き起こす。しかし、それを知る人間は数える程しかない。

とにかく、僕はメイド喫茶からそう遠くない所にある普通のコーヒーショップで暇をつぶす事にした。そこで僕はモカを頼み、クリームとモカをストローで混ぜながら、暇をつぶす。

「はあ。早く待ち時間終わらないかなあ」僕は溜め息をつく。そして、少しモカを飲む。ああ、甘くて冷たい。これこそ、最高のドリンクだ。

バシャツ！この冷たさがいい！あれ、でもなんで冷たいのがシャツに？げっ。そのとき僕は何者かによつて僕のモ力がシャツに飛び散っていた事に気がついた。こんな格好でメイド喫茶には入れない。着替えなくちゃいけねーじゃん。で、着替えている間に空きができ、戻つてきた時にはその空きが他の人間にとられて、もう一時間待つなんて展開は…許せん！

「おい、誰だよ、人に人のモ力ぶっかけといて、謝らない馬鹿は！」
そうすると、僕は不思議な杖を持った女の子と顔が会う。どんな娘かも知る前に、彼女は謝つた。訳じゃない。さらに要求を押し掛けた。

「キミ！ボク達は君の力が必要なんだ！」

「何だよ、人に迷惑かけて、今度は児童向けの某ヒーローにでもなつたつもりか？スペシウム光線なら、自分で撃て」僕は言い返す。

「ほんとに！キミじゃないとダメなんだ！！」彼女はある聖書のような本を出す。それは、外側は青く、聖書としか思えなかった。しかし、彼女はあるページへと捲ろうとする。結局興味を持ってしまった僕は彼女に怒るのを忘れ本の中をのぞく。

「キミの力でどーにか」

「何だよ、この奇怪な文字は」

「これ、漢字だよ！？日本人だよな？」

「えっ？うーん」ある文字をよく観察してみる。うーん、三つ点が縦に並んでいる。それから、「人」という漢字が二つ縦に並んでいて、各「人」には、左右に二つチヨンがあつた。わからないけど、三つの点は…どういう意味だっけ…ああ！さんずいか！で、人に左右の二つのチヨンは「火」か！！さんずいが左にへんとしてあり、火がつくりとして二つ…全く僕はバカか、漢字という物は意味を成し、さんずいの意味は水で、二つの火は火の意味だ。お互いに消し合う物を一つの漢字に入れてどうする？考えてみれば考えてみる程、ばかばかしく思える。「淡」。こんな漢字があつたら、日本は破壊されるよ。お互いに反発しあうような部分をくつつけた漢字等あつ

てたまるか！僕は少女にこれは漢字に非常に似ているけど、漢字でないという事を説明しようとするが、彼女は後ろを恐怖の目で見る。「ああ……うーんもう！来ちゃったよ！！」彼女は唸る。全く変な少女だなあ。

コーヒーシヨップの前からは、黒のスーツ、黄色と赤のネクタイ、カッコイイグラサンをかけた、怪しい男達が来る。更に怪しいのは銃刀法のある日本で、彼らは様々な武器を持っていた。サーベル、レイピア、拳銃、サブマシンガン、刀、マシンピストルとかである。一人だけ青と緑のネクタイを付けた怪しい男が一步前に出る。彼はレイピアを抜き、周囲の人は剣が抜かれる音に驚き、逃げる。そして、僕の隣にいた少女に刃先を向け、彼女に呼びかける。

「トーラ。お前の命はここで終わりだ。その書物の内容は知っている。自分の組織だけで所持して、大量の人間を殺傷させるわけにはいかない。平和な変化を求めているAANMFを代表して言う。書物を渡せ」

「あなた達のやっている事のどこが平和なのよ！！」

喋っている男は彼女を無視し、「仕方がない。殺せ」おいおいおい、いきなりどうなってるんだ！？

銃が発射され、僕はとっさにテーブルを倒しその後ろに隠れる。弾がなぜか一発もあたらなかった事実をそこで知る。僕は自分の運の良さに感謝し、とにかくそのトーラとやらと言う名の少女が攻撃される所を待つ事にした。

標的は僕ではなく、彼女である。彼女がまあ死ぬまでか、降伏するまでかは分からないが、とにかく彼女がいなくなれば僕は安全だ。知らない人間だ。どうなっても、はっきり言って知らない。このように殆ど全ての人間は考える。人間と言うものは、冷酷である。

しかし、少女は別の考え方を持っていたらしい。彼女はどうやってか分からないが、そこら中にあるテーブルを触れずに移動させていた。テーブルは僕の周りに移動させていた。彼女も自分の周りにテーブルを配置し、それを盾のようにして後ろに隠れている。

「移動魔力か？」レイピアを持ったスーツの男は言う。「テーブルをそこまでのコントロールと速度で正確に移動。。。階級は橙辺りか？まあ本の所持者だ。ザコに持たせる訳はないか」

「軽装戦闘部隊にやられる程、ボクも弱くないもん！」

「よくも我ら軽装戦闘部隊をバカにしたな。。。」「レイピアを持った男は静かに言う。「追え！接近戦でやってしまえ！」スーツの男達は銃をスーツの中にしまい込み、腰に下げていた刀剣類を出す。少女は剣を抜いた男達とどうにか戦おうとするが（武器もないのにどうやって戦うのだろうか）、後ろからも定期的な援護射撃があり、テーブルの後ろの隠れる以外に彼女はなにもできない。そして、彼女は杖をテーブルの上に載せ、襲いかかってくる男にそれを銃のように向ける。杖は先から電気のようなものが込み上がり、弾丸のようにならぬ電撃は男に向かって飛ぶ。

「ぎゃあああ！！！」剣を落とし、その男は倒れる。残りの男達もそれに気が付き、一瞬攻撃を止める。少女は杖から電気を溜め、彼らに向け、連中が近づかないようにしながら、僕の襟首をつかむ。

「キミ、早く！！」そして、そのまま僕を引きずる。僕は、彼女が僕をここまで助けてくれる事実をありがたく思うべきなのだろうか。しかし、僕がこのような問題に巻き込まれたのは彼女のせいである為、ありがたく思えない。

「追え！追え！」隊長らしき男は叫ぶ。男達は更に僕たちを追いかけ、銃弾が僕達の周りに当たる。

「ちよつと、ボク、キミをずつとこんな感じはずつと引つ張れないよ！自分で走つてよ」

「ああ」僕は走る。しかし、一日平均百歩歩くか歩かないかの生活を営む僕にとっては、電車に乗ってここのメイド喫茶にくだりだけで相当体力が消費されてしまっている。走るなんてとんでもない！しかし、僕は走る。弾丸に当てられるのはごめんだ。人々は武器を持ったスーツの男を恐れて、僕達と彼らの為に道を開ける。

「ちよつと、休憩をしないか？」僕は少し経つと訊く。

「って、キミ走りはじめた時からまだ数秒しか経ってないよ!?」
うむ。という事は、僕はまだ50メートルも走っていない訳だ。しか
しこれ以上走るのは限界への挑戦、って感じだ!

「でも疲れた〜」と僕は文句を言う。少女はもう一発電撃を撃ち、
サブマシンガンをそこから中に撃ちまくっていた男を撃ち落とす。し
かし、僕達の目の前にももう一人男がいた。

「バカめ!」サーベルを持った、気味悪い笑みを浮かべた男がサー
ベルを少女に向かって、上から斬る。少女は杖で守り、一回男を杖
で当てる。

「全く、お前はどんな馬鹿だよ!なんで、後ろから僕達に絶対当た
らないものを撃っている人間より先に目の前にいる奴を撃ち落とせ
ば良かったじゃん!」僕は筋の通った事をいいながら、走りを止め
る。息が荒い。

「そんな事を説明している暇があるんだったら、こいつを殴ってよ
!キミだつてなにもしてないじゃん!ボク女の子だもん!勝てない
よ」確かに。ここは僕が一肌脱ぐか。僕の真の力をなめんなよ!!
いくぜ!ストレ.....ト!!!そして、撃つべし!撃つべし
!ノックアウト.....男はぶつ倒れた。たりめーだ。僕を
なめんじゃねーぞ。

「すごい!」少女が叫びながら、目を輝かせている。

「げっ!こいつどんだけつえーんだ!!総勢撤退!」男達は、僕の
凜々しい一発のパンチにより即ノックアウトになった男を見て、情
けなく散り散りに逃げた。

「やっぱり!やっぱりキミがいなきや、ボク達は死んでたよ!ほん
とに、ほんとにありがと!」

「ふふっ。この力を、僕は見せたくなかったんだけどね。ちょっと
!」少女が僕の体に抱きついた。

「ほんとにありがと!」彼女はもう一度言う。これって...!!俺は
リア充になったのか?リア充!?リア充だぜ!人生負け組なのに、
リア充だぜ!!!ふふっ。まじめに高校に行ってたバカ共め、リア

充になれるのは、やはり限られた人間なのさ。侍みたいなもんだ。人はリア充にはなれない。リア充に生まれるのだ。

こうして、僕は人生の勝ち組の世界の住人になったのであった。

なぐんてことがあったらいいよね。

ごめんなさい。僕が男を一回殴って倒した所から下に書いてあった全て。それは完全な嘘です。現実に戻りましょうね。全く。今から本当に起こった事を書きます。

ここは僕が一肌脱ぐか。僕の真の力をなめんなよ！！いくぜ！ストレ…………ト！！そして、撃つべし！撃つべし！ノックアウト……………されたのは僕だった。僕のストレートは当たった。しかし、男は何も感じなかった。何回殴ろうと、彼はびくともせず、僕と男の間には情けない空気が数秒間漂う。僕が無駄なパンチをやめると、彼はグラサンを越して僕を見つめ、そして僕はサーベルの柄で鳩尾にやられた。そしてノックアウト……。情けない。こんなことやっていては、俺の夢であるリア充には絶対になれねー。「こ、こいつなんだっただ。この弱さ吹ける」男が笑う。

「はあ…君、知性もダメダメだけど、身体能力も全然だめだね」少女まで戦いやめ、溜め息をつく。そ、それを言うな！僕のただでさえないに等しいプライドが！！僕のただでさえ底辺に近い評価が！これじゃ、プライドなくなっちゃう！お願いだからバカにしないでくれ！

「死にな」男は言う。プライド云々の前にこちらを心配した方が良かったかも。

僕は全てを諦めた。ここで僕の人生は終わるのか。まあダメダメな人生だったし。仏教によると（あれキリスト教だっけ？）、転生してもう一回人生やり直せるんでしょ？それならいいや。そして、僕の閉じそうな目が、白銀の刃が僕に落ちてくるのを見た。

「もうやめて！」少女が叫ぶ。「彼はたまたまボクの近くにいただけだよ！」彼女がまた電撃を撃ち、彼を倒す。しかし、その時には

スーツの男達が僕達の近くに駆けつけていて、僕と彼女を囲んでいた。銃や剣が彼女と僕に向けられた。彼女は杖を構え続けていた。警察も駆けつけていたが、本格的な武装をした集団に抵抗できる筈がない。彼らは、人が僕達に近づかぬよう、検問をしているだけか造園を読んでいる最中かだ。その為今僕達の周り弦径：じゃなくて半径15メートルには昼の秋葉原であるというのにだれもいない。

その半径15メートルを利用して、スーツの隊長はレイピアを鞘に納め、その代わりに杖を内ポケットから抜き、杖を地面にひきずる。そうすると、白いチョークのようなものが道のアスファルトに浮かび上がる。杖で彼はおおよそ弧径：じゃなくておおよそ半径五メートル程の円を描く。その円の中に、星を描き、更にその星の中に三角錐：じゃなくて三角形を書く。

「ベヒーモス様！」スーツの隊長が言う。「見つかりましたよ！捕獲もしました。」

それが魔法の呪文のように、まずチョークみたいな分質が光る。円が炎上する。その炎は、最初は線の上を僅かな火が燃えている程度であったが、だんだんとその炎は大きくなり、しまいには二メートル程の高さになる。警察は驚き、消防隊を呼べ、等と叫び始め、更に一般人を円と僕達から遠下げる。これはいったいなんなのだと野次馬が叫ぶ。人々は警察を押しはじめ、大騒ぎが起こる。そろそろ警察とこれがいったい何なのか知りたがっている人間とのバイオレンスが始まるのか、と思われた瞬間、いきなり円から若い男が登場する。男が来た後、円は一瞬にして炎上しなくなるが、その円を構成するチョークの線は道にまだあった。いきなり登場した男はおおよそ18〜25歳だろう。彼は緑の髪に、長身である。残りのスーツとは違い、マントを着ている。それに、彼は袖が下に垂れるような和服のような服を着ている。その服は青い。一番の特徴は、武器を持っていない事であった。彼は何よりも先に周りを見渡し、それが終わると彼は拳銃を頭に突きつけられている少女に語りかける。

「トーラちゃん、久しぶり。前回会った時はアフガニスタンだったかな？覚えてるよねえ、なにせそこで君の親衛隊は壊滅したのだから…」

「ベヒーモス！やっぱりこの人たちはあなたの兵だったのね」

「さあ、トーラ。早く創世の書をくれよ。可愛い女の子は、戦いたくないだろう？本をくれれば、今回は許してやる。もちろん、取り返しにきた時は殺すけど」

「絶対にあげない！！」

「おいおい、こっちは人20人でお前を囲んでるんだぞ。お前は、杖一本とこのガキだけではないか。勝機があるのか？」

少女は躊躇う。しかし、彼女は首を振り、「やだもん！」と言う。

「さあ、もう諦めな」その男は言う。「私も、君を追いかけるだけが仕事ではないので。面倒は起こしたくないんだ。だから、これ以上血を流す前に渡しなさい」

「そ、そんなことしたら…キミ達が世界を破壊するだけじゃん！！」
「我々が何をしようとも分かっているのか。我々は世界を破壊するのではなく、新設するのだ」

「それ同じでしょ、このバカア！」少女は叫ぶ。

「トーラよ、愚かなお前は、この本がただの武器だと思っているよ。うだ。しかし、それは使いようによっては全然違う物となる」

こんな会話に僕はもうついていけない。難しすぎる。

「でもキミ達は明らかに武器として使おうとしているよ！」

「面倒な小娘だ！」ベヒーモスとかの名前の男は小さな魔法の球を指の上に浮かばせ、それを彼女に向かって飛ばす。

「きゃっ！」球が彼女の手当たり、彼女はスタンガンに当てられたように少しだけ痺れる。しかし、彼女は本を渡さない。

「まだ渡さない気がい？仕方がないなあ」ベヒーモスと言われる男は溜め息まじりに言う。「なら君の隣にいるこいつを殺すか」彼は僕を差しているから、十中八九殺されるのは僕なのだろう。刃が僕の喉元近くに来る。全くお騒がせな少女だ。もうこれはモ力を弁償

しろどころじゃないじゃないか！！しかし彼女はすぐに本を落とす。そこを素早くネズミのようにスイツの男の一人が本を取り、片足を膝につかせながら、敬意を払ってベヒーモスに渡す。

「なかなかあつさりだねえ。まあ、その方が、事が楽だからいいか」
彼は去り始める。

「絶対にボクのせいでもう人を死なせないって、誓ったの…親衛隊の皆も、ボクを助けようとしてくれた人も、みんな死んじゃった。ボクを守ろーとしてね。グスン」彼女は泣きながら言う。「だから、ここからは…ここからは！」

「まあ頑張りな。私に勝てるというのなら、やってみな」ベヒーモスは彼女に挑戦する。「しかし、君は今回の私に感謝するのだな。なにせ私は創世の書だけを要求して、他は要求しておらんからな。では、さようなら。トーラ」彼はその本を受け取ると言う。「また会わない事を願うよ。その時は、君の死に直結するかね」

少女は彼を睨みながら、彼が今度はスイツ達と一緒に円の上に乗った乗り、消える。

そこからは全てがいきなりであった。彼らが消えた事を確かめると、警察が彼女の回りに来る。え？僕の事？僕はもちろん大事にされる訳ないじゃん。少女が倒れているんだ。で悲鳴を上げて、しまいには泣いたんだ。そうすると、男女老若少女の方に行く。これが人生の方程式。ちなみに数学の方程式が何かは忘れちゃった。

「君！大丈夫か？」近くでみていた男性が彼女に駆けつける。

「怪我はない？」他の女性が来る。

たちまち、彼女は野次馬に囲まれ、大丈夫かと言われ続けられる。僕は構われなかった為、すぐに大勢の観衆の中に入り、逃げる。ああ、疲れる。駅まで足が持つか？本当に疲れていて、駅まで歩けん。だって、今日は50メートルも走ったんだからな。あーあ、あんな馬鹿な少女に付き合っているんじゃないかった。今頃、彼女はこの異様な事件の事を警察や野次馬に説明させられてるんだろっとなあ。そんな事を考えていると、シャツがモ力でシミだらけになっている

事を思い出す。あーあ。それもあいつのせいだ。あんなのにはもう関わらないようにしよう。僕が関わる女子はメイド喫茶のメイドみたいな人間がいい。あれは、変な要求をしてこないし（こちら側が変な要求をする事はあるかもしれんけど）、問題はおこさんし、いきなり武装集団と戦わされたりしないし、命は危うくならないし、一番大事に疲れないよ。

僕はこの後、バスに何とか乗り、家まで帰った。無論、その日はすぐに寝た。1キロ以上も歩いたんだ。疲れるに決まってる。500メートル歩くのも僕にとっては相当な芸当だというのに。疲れていたからだ。僕は、ベッドに倒れ込み、いびきを大きくかきながら、今日がもし普通だったら、と考えながら平和な夢を見た。

しかしなんなのだったのだろうか？創世の書とか、あの魔法のようにテーブルが動いた事とか、いきなり男が炎の中から出てきた事とか、杖からいきなり電撃が出た事とか。あれは全て何だったのだろうか？僕もあんな力があればなあ…人生は流石に違っただろう。そして、絶対にあのトーラと言う少女とか関わらない事にしよう。危険過ぎたよ、全く。

等等と思った僕であったが、僕はすぐに魔法を知る事になる。そして、トーラと言う名の金髪の少女にもまた関わる事になる。それも、自分が思ったよりも近い未来にである。

一章―金髪の少女と面倒な事件（後書き）

一章終わったあwくだらないストーリーですねwwwこれ笑えるのかなwww笑えたらいいんだけどwww

これから章を分割して出します。その方が読者もずっと来るだろうし。次も読んで頂いてくれればありがたいですwww

第2章前半（前書き）

ここまでの登場人物：北谷蔭一 - 主人公。社会の底辺の評価を持つ男。エロゲを買おうとしたら戦いに巻き込まれてしまった、ある意味可哀想な人間。

トーラ：一応ヒロイン。主人公をなぜか必要とする金髪の少女。魔法が使える。

ベヒーモス：トーラが所有する本を手下を連れて奪おうとし、成功した魔通師。

タイガーズアイ：橙色の宝石/鉱物。

撃鉄：拳銃を発砲するのを阻止する器具。いわゆるセーフティ。起こす事で銃を発砲できるようにする。

第2章前半

第3章 - 本、目的、そして僕の存在

僕はゆっくりと起きた。目をゆっくりと僕は開ける。窓を越して届いた日光が眩しい。ああ、また新たな一日だ。僕は布団をゆっくりと押しつける。まず、僕は時間を確かめる。朝の十時半。平日であるのに、こんなに遅く起きるのはいかなるものかと人々は思うかもしれないが、別に僕は学校にでも行く訳でもないから、別に何も問題はない。次に、僕は天候を窓越しに見る。快い、雲一つもない日だ。きれいな晴れだし（まあ、どうせ僕の部屋に一日中いる僕に取っては関係ないが）。その次に僕がいつも見るものは扉の下に置いてあるとあるありがたいものである。僕の扉の下にある本来ペットにえさを与える為に存在すると思わしき扉の元には朝ご飯が床においてある。僕はその朝ご飯の内容をみる。和風ですな。固い、茶碗の半分も満たさない量のご飯。冷めた、みそが下に完全に沈殿したみそ汁。魚 - いや、5分の4はもう食われている魚だ。後、漬け物は皿だけであった。多分急いで学校に行くため全てを食べられなかった妹の残りものだろう。まとめて、比較的良好朝飯だ。昨日はみそ汁なんか、具がなかったし、ご飯はなかった。母の機嫌がよほどいいのだろう。天気のおかげかな。天気はどんな人種、階級、性格、性別の人間の感情も左右すると言う事は事実だな。ご飯とみそ汁と、殆ど骨だけの魚をコンピューターのある机に持っていき、コンピューターを立ち上げる。

さてさて、誰かなにか掲示板等に投稿したかな？まずは3チャンネルを確かめる。うむ、誰も投稿していないな。ちえっ、皆学校に行つてて投稿しないのかよ。僕は新たなウィンドウを開けて今度は「顔本」を開ける。こちらも通知はゼロか。誰か返信しろよ。次は「ブヒッター」である。誰か「ブヒ」ってるかなあ…おうなんか来てる。中学のからの友達、高山からだ。

「ふむふむなにになに？」僕は思わず声に出して言う。「俺様は今日からリア充だぜい！お前も学校に行けば、リア充にもなれるかもよ！」ふーん、つててめえ死ねよ！ついに高山まで勝ち組の方へと歩み始めたか！つーかさりげなく中卒である事をバカにするなあ！」
「だまらっしゃい！」と言いなながら母が下から箒で天井を叩いている音が聞こえる。箒で天井を叩いて叫びまくるつて、どれくらい古くさいんだよ。

まさか。あの高山が、あの下ネタ大好き変態が彼女持ちとは！ガリレオの法則が無視されてリンゴが木から離れても落ちないのより異常だ！え？ニュートン？ニュートンの法則？そちらだったのですか…じゃあニュートンの法則で。

さて、朝飯も終わった事だし、と思い朝ご飯が乗っていたトレイに全ての食器を入れ、戸の下の方にある、小さな戸を開け、トレイを出す。で、その近くにある鈴を鳴らす。チリンチリン。

「あなたが取りなさい」母の声がする。

「え〜お母さん、あんな変態オタクニートの部屋なんか近づきたくないよ〜」妹が異議を唱える。なぜ妹がこの時間に家にいるのだろうか。ああ、そっか今日は祝日か。まあ僕にとっては毎日が休みだから関係ないけど。

「お母さんもいやです。さあ、早く取りにいきなさい」

「わかったよ〜」妹が不満そうに返答し、命令に従う。
妹がきて、食器を回収する。全く。

このような非常に不便な朝ご飯のシステムがあるのは、母と妹は僕の事をみたくないからだ。ここまで息子が嫌われるケースは、我が家以外にもあるのだろうか？
妹の足音が遠下がる。一階に行ったようだ。いつものように皿洗いだろう。なら僕もいつものように一日を始めるか。

僕はあらかじめ立ち上がっていたお気に入りから、エロ動画サイトをクリックする。よし。新たな動画が入ったようだ。新たな動画の中から、自分が気に入るような動画を選択し、「最生」ボタンを

クリックする。

「早くロードしろ…」僕は呟き、そして心の中で叫ぶ。よしよし始まるぞ！

「ふうん。キミはこんな動画を見るんだ…」聞こえのある声がする。僕は驚き仰天する。なにせ、僕の部屋には普通僕しかいないのだから。

「だ、誰だこのなんとかなんとか侵入者！」このようなときに、もう少し社会を勉強していれば…などと思う。いや、これはもう日本語の問題かな？

「不法侵入者？」

「そうそうそれ。つーか、またお前かよ！」僕が座っている回転式の椅子の背もたれに腕を乗せながらあの少女が言う。

「お前じゃなくて、エレーナだよ！」少女は一生懸命な顔で訴える。

「えれーな？お前、トールとか言う名前じゃなかったっけ？」僕は必死に記憶を探りながら、名前を思い出す。

「トールじゃなくて、トーラ。でも、それはボクのコードネーム。だから、エレーナって呼んで」僕は彼女をもう少し注意深く見る。

いろいろなドタバタのせいで、彼女がどんな感じの人だか分からなかったからだ。ショートに切った金髪。ちよつと男の子っぽいヘアスタイルかもしれない。それから、青い目。その目は僕の部屋を純粹な、興味津々な目で見ている。できれば見ないで頂きたいものもある。なので、なんかいやだ。彼女は、ある種の制服のような物をきている。それは基本的には白であるが、赤の線が縦にある。また、首の所の外側に青い線が入っている。そして、彼女は白い小さな、上に膨らみのある帽子を被っている。コック帽に似ているかな？外見から見て、14歳位か？最後に僕は彼女が首から二つものをかけている事に気が付く。一つはタイガーズアイのネックレスであり、もう一つはフラッシュメモリのようなものである。僕はそんな彼女を何となく見る。

「？ボクに何かついてる？」彼女は僕に訊く。

「え？いいやそんな事はない」僕は言う。

「…もしかして」彼女は僕のコンピュータの画面を見る。そこには一時停止してあるエロ動画が全画面に映っている。「ボクの事エッチな目で見てない？」

「は？おいおいちよつとなにいきなりほぼ初対面の人に…」

「そーなの？」

「いいやそれは絶対じゃない！」本当だ。どうか信じて下さい！

「ふ〜ん」彼女は僕を疑うような目つきで僕の顔を見る。

「んで？何の用だよ。人にモカぶっかけて、銃撃戦に僕を持ち込んで」とにかく話題を逸らそう。

「うん！」うん、ってなんだよ。ふつーそこ謝るだろ。迷惑かけてんだから。せつかく謝るチャンスを与えてやったのに。

「ボク、あそこでも言ったよね。キミが必要だって」

「ああ。どう僕みたいな人間が必要なんだ？」

「キミみたいなダメダメヘタレ中卒ニートが必要なんだよ」

「だから俺の質問に…ってかそれ言い過ぎだろ！つーかそれなんで知ってるんだよ！」

「キミの名前は何？」全く。俺の質問に答える。

「ん？北谷が上で蔣一下の名前だが」面倒くさそうに言う。

「そっか」そこで彼女は咳払いをし、大きな声で言う。「キミ、北

谷蔣一は魔通師になれるよ！それも、信じられない程の実力の！」

「は？」僕は答える。「まつ牛って何？」

「魔通師！魔通師も知らないの？」少女は答える。「っているか、もう少し驚いてよ…普通誰でもこれ聞いたら、恐れるか喜ぶかのどちらなんだから…」僕はそのまま理解せずに彼女を怪しげな目で見つめる。

「で、そのまつ牛は何すんの？」

「まあ、基本的に魔法を使う人の事だよ」

「それは魔術師じゃないのか？」

「それは古い言い方。魔術師は直接魔法を使うだけの人の事で、魔

通師は魔力を通じて、応用して生活を営む人の事だよ」

「へえ」基本同じじゃねえか。「で、だったらその応用された魔力ってどんなもんだよ」

「うーん、皆習えばどんな魔法もちよつとはできるけど、皆一つだけ得意で絶大な力を引つ張りだせる魔法を持つてるんだよ。魔通師は、例えばボクだったらこんな事が出来るよ」彼女は確か始めてあつた時も持っていた、あの金色の杖を出す。彼女は杖のある部分を開き、そこからは撃鉄のような彼女はその杖を部屋の壁に向ける。丁度、ベッドがある部屋の左隅へと向ける。彼女が撃鉄のようなものを引つ張ると、昨日見たように杖には電撃が溜まり、彼女はその撃鉄から手をはなる事により杖を発砲する。一瞬金色の杖が電気の光を反射し、更に光る。

その後、ガズンと言った爆音に近い程の音が出、次の瞬間、巨大な打撃の音と何かが崩れ去る音が聞こえる。そして、埃と煙が舞上がり、数秒間自分の目の前にあつた手も見えない。煙と埃が収まった数秒後、

「なんじゃこりゃあああああああ！！！！」僕の部屋の左隅の壁、床、そして僕のベッドの半分が消えていた。いや、厳密に言えば、部屋の壁は粉碎され、下の庭へと落ちていた。そして、破壊されていなかった部分のベッドが庭へと滑り落ち、ぶつ壊れた。

「うん！これはね、『天空神の小銃』^{ゼウススライフル}って言うんだよ！すごいでしょ！」満面の笑みを浮かべて少女、いや、トール、いや、トーラ、いや、もうはつきり言つて名前忘れちゃまったが言つ。

「『すごいでしょ』じゃねえボケえ！修理代どうしてくれるんだよ！大体、これで僕に魔なんとか師がいい印象になったと思つてんのかよ！？一応、僕の家族がこれ払うんだぜ！つーか、こんなに破損された家修復できるかよ！もうお前みたいなボケとは会いたくねえ！」僕はここで間を置き、「お前僕の人生を破壊する為に、僕の人生に介入してきたのか？」答えはない。しかし、荒げな呼吸が聞こえる。その後、シクシクと小さな声も聞こえる。「ん？」僕は彼女

を見る。

「そんなにひど言わなくてもいいじゃん！きみひどいよ！ボクは…ボクは…ただ…」

「僕の家に対空型ミサイルランチャー並の爆風で僕の部屋を破壊したかっただけだ」僕は冷たく彼女の言っていた事を終わらせる。

「うえ〜ん！」彼女は泣きじゃくる。「だって…だって…こんな事に…なるまでだと思わなかったし…ここまで怒る…と思わなかったんだもん…シクシク」さすがに僕も気が悪くなり、慰めてやる事にする。

「まあまあ、それは済まなかった。確かに僕が悪かったよ。ここまですぐ怒鳴る事もなかったな」こう言い、彼女は少し泣き止む。おいちよい待ち。僕の部屋は粉碎されたのに、なんでボクは粉碎した人に謝っているのだろうか？

「シクシク…シクシク…で…蒋一はどー思う？魔通師になってみようと思う？シクシク」彼女は訊く。

「ん。。まあ、ちょっとなりたくねー、つか物破壊して社会問題になりそうな人になりたくねーし…」エレーナ（やっと名前思い出した）はまた泣き始める。

「だ、だから別にここまで…」また泣きはじめた。

「ってか、すまんすまん、言いたかったのはここまですごい事は出来んだろうと思って」彼女はここで一応泣き止む。

「でも、グスン、蒋一なら絶対なれるよグスン」

「え？」この人生でゲーム以外に何も得意でなかった僕が、何か出来るだど？

「うん。蒋一は生粋に純粋だから」

「へえ！」僕の魔力は生粋に純粋か…確か聞いた事がある。魔力は自分の血に流れている魔力が純粋である程、効率がいいと。え？つかお前ゲームやり過ぎ？うるさいなあ、「確か聞いた事がある」って言うと、もっとかっこいいんだよ。え？そこが突っ込まれていいとこじゃない？

第2章前半（後書き）

受験大戦の砲火が厳しい。。。小説書く暇がない。。。これはただの推敲だから早く終わる筈なのに。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9776y/>

託された魔通師と守った魔通師

2011年12月11日17時45分発行